

ZENBI

全国美術館会議機関誌

February 2023 [Vol.23]

Feb. 2023

守る。

イオケミシート

展示ケースの床面・壁面等に
ひろげて使用することで、
ケース内のガス濃度を低減します。

美術品の周りには多くの化学物質が、
さまざまな場所から発生しています。
それらが美術品の劣化・変色・腐食などの
損傷を引き起こす要因となります。

イオケミパッド

調湿スペース、展示台の裏、
収納棚や保管箱などに設置できます。

美術品を



本社 〒164-0012
東京都中野区本町 1-32-2 ハーモニータワー 28F
TEL:03-5352-7202

▼購入はこちら▼



CONTENTS

ブロック報告

- 2 [北海道] 東の「はしっこ」の美術館と展覧会活動 武東祥子
- 4 [東北] 東北へのモダンな眼ざし 堀 宜雄
- 6 [関東] 地域におけるパブリック・アートのこれから 森 啓輔
- 8 [東京] コロナの影響が薄れる中で 岡里 崇
- 10 [北信越] 2021年度と2022年度の入館者を見る 的場久良
- 12 [東海] 展示の変化 田中善明
- 14 [近畿] 関西 現代美術の潮流をたどるタイムトリップ 中山摩衣子
- 16 [中国] 「アフターコロナ」の地方とアート 佐々木千恵
- 18 [四国] 「生」でみること 井須圭太郎
- 20 [九州] そこに積み重なるもの(は時も場所も越えて) 佐々木奈美子

部会報告

- 22 — 保存研究部会 盛本直美
- 23 — 教育普及研究部会 中村貴絵
- 24 — 情報・資料研究部会 鴨木年泰
- 25 — 小規模館研究部会 苦名 真
- 26 — 美術館運営制度研究部会 安田篤生
- 27 — 地域美術研究部会 重松知美

- 賛助会員各社 28
- 事務局から 30
- 専門委員会から 31
- 投稿要領 32
- ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35
- 編集後記 35

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.23 2023年2月1日発行 ©(一社)全国美術館会議
[編集] (一社)全国美術館会議広報委員会
[発行者] (一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555
[デザイン] 宮谷一孝 [印刷] 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

東の「はしっこ」の美術館と 展覧会活動

武束祥子(たけたばしょうこ・釧路市立美術館)



北海道東部、東経144度線上に、3つの公立美術館がある。網走市立美術館、北海道立釧路芸術館、そして筆者が勤める釧路市立美術館である。コロナ禍が依然として続く中、3年ぶりに行動制限がない夏を迎えた2022年は、北海道新聞が創刊80周年の節目を迎え、「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」(北海道立近代美術館、4月22日～6月26日)をはじめ、注目の記念展が北海道各地で開催されたが、本稿では、日本最東端に位置する美術館に焦点をあて、展覧会活動を報告したい。

日本で最北端の公立美術館でもある網走市立美術館は、開館50周年を記念して3つの特別展を企画し、第1弾として、7月30日から9月11日に「海洋堂エヴァンゲリオンフィギュアワールド」展を開催した。アニメファンやフィギュアファンを中心に注目を集めた本展は、アニメ作品の名場面を箱型ジオラマで再現する新しい形式をとり、ストーリーとともにエヴァンゲリオンの世界をスタイリッシュに紹介した。工夫をこらした精緻な情景の中、ダイナミックな動きをみせるキャラクターたちに興奮をかくせない来館者も多かったように思う。アニメーションの放映は、ブラウン管テレビ。丸みを帯びた映像に懐かしさを感じ、アニメが放送された当時の状況まで再現したのかと驚いたが、後日、同館が現役で使用しているモニターであったことが判明し、さらに目を見開いた。聞けば、会場の展示台もすべて職員の自作であるという。

館長兼学芸員1名と事務2名で、受付監視業務、イベントをこなしながら、設備のメンテナンスまで対応するというのだから、頭が下がる。

本展は、好評を博し美術鑑賞の入り口として、子供から大人まで、幅広い年齢層に受け入れられたようである。エヴァンゲリオンのTシャツを着た青年が、同館の常設展示室で、オホーツクの画家、居串佳一の油彩に感嘆の声をもらした姿が、深く印象に残った。

同時期、当館では北海道新聞創刊80周年記念展の一つとして、「MINIATURE LIFE 展 田中達也 見立ての世界」(7月16日～9月11日)を開催した。田中達也は、ジオラマ用の人形と身近な日用品を組み合わせて、別の何かに見立てたミニチュア作品を手がける写真家で、遊び心にあふれた作品を毎日インターネット上で発表している。前号の北信越ブロックで「MINIATURE LIFE 展2」での盛況ぶりが報告されたが、当館でも、30年続く展覧会事業の中で歴代3位の入場者数を記録した。意図したことはなかったが、本展と網走市立美術館の海洋堂フィギュア展が、模型ファンの中でうまくみ合ったことも、幸運であった。網走—釧路ルートで、美術展のはしごを楽しんだ人々も相当数いたようだ。こうした展覧会が旅の契機となり、地域経済と地域振興にも貢献できることは、美術館にとっても幸いなことである。

北海道立釧路芸術館は、地域の文化資産やコレクションを活用した事業が際立っている。4月23

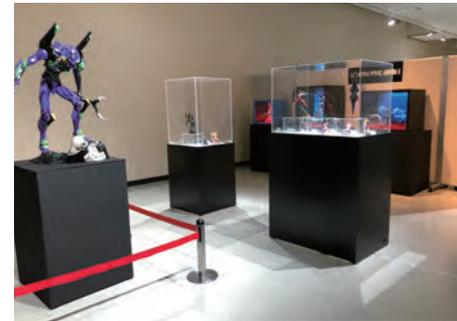
日から6月19日は、笠間日動美術館のコレクションから、日本洋画の草分けである高橋由一をはじめ、黒田清輝、青木繁、梅原龍三郎など明治期以降の巨匠の秀作を一堂に展覧する「日本の洋画130年展 具象表現の栄光」を開催。笠間市出身の画家・山下りんのイコンを、釧路ハリストス正教会のイコンとあわせた特集展示を組むとともに、根室出身の画家、赤穴宏と、釧路で制作を続けた扇谷章二の洋画も、展覧会の文脈に入れ込んで紹介した。

さらに同館が9月17日から11月23日に開催した「祈りの造形(かたち) 地域の記憶 厚岸・国泰寺の200年」展は、深く地域に寄り添った展覧会であった。国泰寺は、江戸時代後期、ロシアの南下など北辺の危機が叫ばれる中で、文化元(1804)年に江戸幕府が蝦夷地政策の目的で整備を決定した蝦夷三官寺のひとつで、本地域において重要な歴史的役割を果たした。会場では、建立当時の東蝦夷地の在り様を表した絵地図、江戸から厚岸へもたらされた仏画や仏具、そして住職らが

書き綴った『日鑑記』など、貴重な資料を紹介し、今に続く200年の歴史と文化にスポットをあてた。

釧路、根室地方の文化芸術を担う北海道立釧路芸術館に対して、釧路市生涯学習センター(通称:まなぼつと幣舞)内に開設された当館は、「学び」と「体験」の場としての機能がより大きく求められる。展覧会活動では美術をはじめ、アニメや漫画、デザインなど多様な表現の垣根をとりはらい、「住民のための美術体験」をキーワードに企画を立案。本稿執筆時(10月)に開催中の展覧会「小川けんいちワールド」(9月23日～11月13日)では、「絵は自由だ。うまいへたってなんだろう」という釧路市出身の作家の言葉をテーマに、商業デザインから漫画、絵本、そして膨大なイラストを紹介し、あわせて市民参加の似顔絵ワークショップ作品を展示した。

多くの美術館が、地域との関わりの中で独自の活動を試行錯誤していることだろう。この地方と美術館の「らしさ」を考えながら、地域住民にとってのよりよい未来を志向していきたい。



網走市立美術館「海洋堂エヴァンゲリオンフィギュアワールド」展 会場風景



北海道立釧路芸術館「祈りの造形 地域の記憶 厚岸・国泰寺の200年」展 会場風景

東北へのモダンな眼ざし

堀 宜雄 (ほり よしお・福島県立美術館)



展覧会というメディアの場合、書籍では許される、資料とレトリックで話を続けることが、うまく立ち行かない場合がある。展示される作品(モノ)と作品(モノ)との関連性、ガチンコのぶつかり合いのようなものが、展覧会というストーリーには必要なのだ。

はじめ、ブルーノ・タウトと柳宗悦のみた東北という企画案が持ち込まれた。東日本大震災から10年、東北の美を再認識するよいきっかけではないか、と発案者の建築史家がその開催意義を力説した。民藝の部分は日本民藝館からまとめてお借りできるとのことだが、問題は、タウトの方だった。たしかに、タウトは東北と縁が深い。仙台の工芸指導所で4ヶ月ほど教えているし、秋田には2度訪れている。ただいかにせん、展示物としては、紙資料がほとんどで、タウトが手がけたデザイン・プロダクツは、群馬移住後の仕事であり、桂離宮の印象を描いた「画帖」も、東北とは関係がない。展示としては、説得力のある「もの」が乏しいのである。「やめるか。」「もう少し枠を広げれば、成り立つのでは。」企画に興味を示した岩手県立美術館との間で、議論がはじまった。結果的に、「東北とモダニスト」という設定を新たに考えて、1930年代から第二次世界大戦終了までの期間に、タウト、柳宗悦、シャルロット・ペリアン、今和次郎・純三、吉井忠などが注目した東北像をたどる企画展が構想された。タイトルは「東北へのまなざし 1930-1945」と決まり、2022年4月から9月まで約半年

間、岩手、福島、東京を巡回することとなった。(岩手県立美術館：4月9日～5月15日、福島県立美術館：6月4日～7月10日、東京ステーションギャラリー：7月23日～9月25日)

調査は、東北一円くまなく、という訳にはいかなかった。予算と時間が限られる中、企画委員の助言を受けながら、東北の二つの機関、仙台の工芸指導所、山形の略称「雪調」(積雪地方農村経済調査所)にかかわる資料が残されている、タウトの岩波資料(早稲田大学図書館寄託)、雪の里情報館(山形県新庄市)、山形県立博物館などをまわり、調査と出品交渉を行った。また、今和次郎と純三の資料は、工学院大学にアーカイブがあり、2011年の回顧展(青森県立美術館他)でも紹介されているので、再確認作業をおこなった。ほかに、宮城県美術館に『工藝』120冊の揃いがあるため、これも出品をお願いし、『月刊民藝』の調査もさせていただいた。民藝支援者として知られる、岩手の吉川保正、青森の大川亮関係、福島・会津本郷などにもアプローチし、さらに仙台市博物館の資料と研究は、展覧会への大きな後押しとなった。タウトを案内した、秋田の版画家・勝平得之の資料は、秋田市立赤れんが郷土館にあり、また秋田の民具を多数所蔵する秋田県立博物館、タウトが訪れた豪農奈良家にも足を運んだ。

展覧会の枠組みと出品作品・資料が見えてきた中で、開催各館学芸員と企画委員をまじえ、展覧会についての討議をおこなった。当初、便利と言

い回しとして使った「モダニスト」という言葉は、タウトについていうなら誤っているという建築史上のコンセンサスもあり、結果的に「モダンな眼」という言い方に変更した。また、一個人に集約しづらい郷土玩具を収集する人々についても、きわめて1930年代の東北を特徴づける動きであるため、章を設けて紹介することとした。近年『アウト・オブ・民藝』を刊行して活動する、軸原ヨウスケ・中村裕太の研究成果も反映したいと考えたからである。軸原・中村両氏は、同書の普及活動として、「アウト・オブ・民藝」秋田雪櫃編、東京物欲編と命名した展示活動も行っている。彼らは、人的な交遊影響関係と、思想やその成果としての著書などを総合的にビジュアル展示する「相関図」を多用している。これも、複雑な影響関係を読み解く有効な手段と判断し、タウトと勝平得之の手記を時系列に並置しながら、旅のイメージとなる、写真、新聞記事、民具、玩具等を一枚の大きなパネルとする

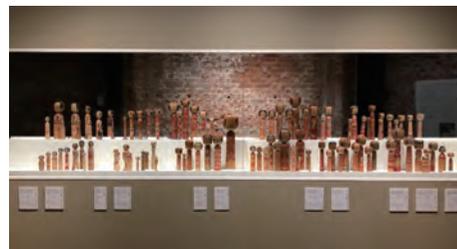
こととした。

こうして、I章/ブルーノ・タウト、II章/柳宗悦、III章/郷土玩具収集(武井武雄・山内神斧・米浪庄三郎)、IV章/雪調(シャルロット・ペリアンと今和次郎、柳宗悦)、V章/今和次郎と今純三、VI章/吉井忠といった人々の、複層的なまなざしの行方を、400点をこえる作品資料でたどる展覧会は生まれた。

カタログ編集と展示作業は想像以上に大変であったが、3館の学芸員が力を合わせて切り抜けることができた。展覧会を通して見えたこととしては、同じ生活用品やおもちゃなどのモノを、「民具」「民藝」「郷土玩具」などと呼ぶことになったのが、この1930年代であるということ。それらをどう価値付けして呼ぶか、という収集者の定義づけの問題が浮き彫りになった。いずれにせよ、民藝、民具学、民家研究、民俗学という学問思潮の揺籃は、まちがいなく東北地方なのである。



タウト、秋田の旅 パネル I章 ブルーノ・タウトの東北「探検」
岩手県立美術館展示



III章 郷土玩具の王国 東京ステーションギャラリー展示



II章 柳宗悦の東北美学 岩手県立美術館展示



IV章 雪調ユートピア 福島県立美術館展示

地域における パブリック・アートのこれから

森 啓輔 (もり けいすけ・千葉市美術館)



筆者は2022年4月から9月まで、千葉市美術館と京都国立近代美術館の共催で行われた企画展「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」(以下、「清水九兵衛展」)を担当した。清水九兵衛(1922-2006)は、京都で250年以上続く窯元・清水家の七代六兵衛として、さらには1970年代以降の野外彫刻展をはじめとする彫刻の分野で、目覚ましい功績を残した人物だ。全国各地に設置された屋外彫刻の数々は、戦後の経済成長期に行政を主導とする都市計画において、この彫刻家がどのような役割を担ったか、その重要性を示すものだろう。本展は、そのような清水の初の回顧展として、彫刻と陶芸の二つの領域での造形活動を包括的に検証する目的を持って企画された。なお、清水に関する言及が、ここでの本来の主旨から逸脱してしまう可能性があることを予めお詫び申し上げたい。ただし、関東ブロックにおいて清水の屋外彫刻は美術館のみならず、宇都宮市役所や上尾市役所など複数の公共施設に設置され、関東圏だけでも多数におよぶ。そして、それらには設置から30年以上経過している作品もあり、今後の維持管理に多くの課題があることを調査の過程で知ることとなった。作品に関連する機関との緊密な情報共有も、開催にあたり課題とされたのであり、本稿では清水の屋外彫刻を起点にパブリック・アートに関する現状と今後について触れたい。

本誌でも全国から報告されているように、新型コロナウイルスの感染拡大は、美術館の事業に大

きな影響を与え続けている。2020年春の状況を振り返るならば、緊急事態宣言の発出を受け、人と物の移動が制限されたことは、展覧会の実施への障壁となり、対応策として各館ごとに所蔵するコレクションや既存の設備の活用といった創意工夫がなされた。そして、展覧会におけるそのような取り組みは、移動を制限せざるを得なかった各地域の人々に、日々を過ごす場所への意識を促し、過去の歴史や文化、さらにはそれらにまつわる個人の記憶に触れる場として、美術館の価値が見直されることとなったように思われる。地域の文化やコミュニティと関わる美術館本来の使命は、同じ生活圏にあるパブリック・アートとも相関するものであろう。公共性について、特に近年の社会動向の変化に伴い、複数の視点からそのあり方が問われている今だからこそ、作品の存在可能性が広く議論されることには一定の意義があるはずだ。

しかし、そもそもパブリック・アートは管理者側の経費、技術的負担が大きく、中長期的な維持管理にネガティブな側面が見出される傾向にあるのは、周知の事実だ。清水は、1980年に発表された《緋甲 (PROTECTOR I)》で、以後の代名詞ともなる作品への朱色の塗装を初めて試みた。その理由の一つに耐候性の問題が挙げられるが、恒久設置が前提とされた清水の作品においても、継続的なメンテナンスが必要であることは言うまでもない。だからこそ、美術館に限らず管理する施設が複数にまたがる作家の作品については、点か

ら線へと、作品を繋ぐネットワークの構築の必要性を感じた。筆者の所属するブロックに限るならば、「清水九兵衛展」では、1970年代に清水が自身の造形思考を深めていった「アフィニティ (親和)」の概念について、作品と空間との関係の展開を示す《AFFINITYの継続》を箱根 彫刻の森美術館より借用でき、また「戦後抽象彫刻と清水九兵衛」と題したトークイベントで、《BELT》を設置する神奈川県立近代美術館から菊川亜騎氏に登壇いただけたことは、作品の現状を関係者間で共有するまたとない機会となった。さらに、千葉県内では唯一作品が設置されているDIC川村記念美術館と、SNSを中心とした広報の連携を通じ、「清水九兵衛展」と同時期に開催された企画展「カラーフィールド 色の海を泳ぐ」(3月19日～9月4日)の情報を双方向で発信した。同展は、清水が1966年に彫刻家へ転向した時代の海外での動向を知ることができる展覧会であり、その連携の

意義を強く感じるものであった。

「生誕100年」という人の活動期間として、数世代にまたがる年数を冠した企画展は、これまでも様々な館で行われてきた。「清水九兵衛展」においても、八代清水六兵衛氏をはじめ故人と繋ぐの深い方々の支えなしには、新たな発見と問題提起が実現しなかったものであり、作品制作に長年携わられた元アシスタントの藤岡五郎氏より、過去の作品にまつわる技法や組成、さらには近年の作品修復の取り組みについて最新の知見を得られたことは、清水の作品理解の更新への大きな要因となった。人間の生を超えて、美術作品を次代へと繋いでいくこと。ともに物質の有限性に関わるこの困難の認識とともに、デジタル技術を用いた情報の扱いの利便性が向上した現在だからこそ、そのためのネットワークの構築に向けて、情報の共有と有効活用のさらなる検討が望まれる。



千葉市美術館「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」会場風景



DIC川村記念美術館「カラーフィールド 色の海を泳ぐ」会場風景

コロナの影響が薄れる中で

岡里 崇(おかざと たかし・上野の森美術館)



2022年4月から10月の約半年間は新型コロナウイルスの影響が薄れてきた期間と言える。10月末時点では一見して美術館、博物館は活況を呈しているように見える。しかしながら新型コロナウイルスの流行以降は、入場者数の制限、オンラインでの日時指定制予約システムの導入、入場料の値上がりなどが観客に大きな影響を与えている。もはや気軽に展覧会に行ける時代ではなくなってしまった。館側にとっても新型コロナウイルス感染拡大以降の様々な影響は払拭されてはならず、取り巻く環境は依然として厳しい。

東京ではこの期間に見るべき展示も多かったように思えるが、報告は都心部の西洋美術・現代美術中心になってしまったことを予めお断りしておきたい。

まずは館のリニューアルから取り上げたい。3月19日に泉屋博古館東京(旧泉屋博古館分館)がリニューアルオープンした。空調、照明設備を新たにし、カフェ、ショップ、講堂を新設し、館名変更とロゴの制定も行った。三井記念美術館も空調、照明の更新とショップの拡張などを行って4月29日にオープンした。静嘉堂文庫美術館は10月1日に、1934年竣工の重要文化財建築、丸の内の明治生命館に新しい展示室をオープンさせた。受付を入ると広がる美しいホワイエはこの館の大きな魅力となっている。

国立西洋美術館は、1959年の開館当初の前庭の様子に近づける工事を経て4月9日にコレク

ション展で再開した。6月4日からは「国立西洋美術館リニューアルオープン記念 自然と人のダイアログ フリードリヒ・モネ、ゴッホからリヒターまで」展(6月4日～9月11日)を開催し、22万人以上の来場者を集めた。リニューアルへの期待感、テーマの親しみやすさなどが入場者を押し上げたと推察される。

この展示でモネ作品と並べて展示されたゲルハルト・リヒターの作品が話題になっていたようだが、これより早く開幕したポーラ美術館の「ポーラ美術館開館20周年記念展 モネからリヒターへ—新収蔵作品を中心に」(4月9日～9月6日)でもモネと並んだリヒター作品が話題となったようだ。さらに遡ればエスパス ルイ・ヴィトン大阪での「ゲルハルト・リヒター『Abstrakt』展」(2021年11月19日～2022年5月15日)は多数のリヒター作品が並んで圧巻であった。リヒターの展示が続いて注目が高まっていたのが東京国立近代美術館の「ゲルハルト・リヒター展」(6月7日～10月2日)は現代美術としては異例の混雑となった。会期初めと会期末に整理券が配布され、会期末には臨時開館や開館時間延長も行われた。

森美術館の「Chim↑Pom展：ハッピーズプリング」(2月18日～5月29日)も会期後半にはかなりの賑わいを見せていたが、会期前半がまん延防止措置と重なり入場者が少なかったのは残念だ。

上記の「ゲルハルト・リヒター展」では絵画と写真の関係が重要な要素の一つだが、アーティゾン

美術館の「ジャム・セッション 石橋財団コレクション×柴田敏雄×鈴木理策 写真と絵画—セザンヌより柴田敏雄と鈴木理策」展(4月29日～7月10日)は印象派の絵画と柴田敏雄、鈴木理策の写真作品を並置して、絵画と現代写真の関係を問う展示で評判となっていた。写真展では、東京都庭園美術館の「蜷川実花『瞬く光の庭』」展(6月25日～9月4日)は、新型コロナウイルスの流行や展示会場の事情など様々な要因が重なった結果、これまでのこの作家の常套手段であった鑑賞者を圧倒する展示手法から方向転換し、新境地を示した。また東京都写真美術館の「TOPコレクション メメント・モリと写真 死は何を照らし出すのか」展(6月17日～9月25日)は最終日に待ち時間が出て開館時間の延長までしたと聞き驚かされた。

地道な調査に基づいた展示も取り上げたい。町田市立国際版画美術館の「彫刻刀が刻む戦後日本—2つの民衆版画運動 工場、田んぼで、教室で みんな、かつては版画家だった」展(4月23日～7月3日)は、美術史から零れ落ちてきた版画運動を擲り上げる優れた展示として話題に上っていた。練馬区立美術館の「日本の中のマネー出会い、120年のイメージ」展(9月4日～11月3日)は

マネの国内所蔵作品、マネが影響を与えた日本人作家の作品を多数集めて、位置付けの難しいこの画家の日本での受容について分析した展示であった。渋谷区立松濤美術館の「津田青楓 図案と、時代と」展(6月18日～8月14日)は、《犠牲者》(東京国立近代美術館蔵)の作者として知られる津田青楓の、見過ごされがちだった図案家としての側面を掘り起こす試みであった。同館の「装いの力—異性装の日本史」展(9月3日～10月30日)は日本の異性装の歴史を跡付けた意欲的な展示で、若者たちで混雑していたのが印象的であった。

この半年間にはコレクターに光が当たる展示も多かった。国立新美術館の「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」(6月29日～9月26日)、国立西洋美術館の「自然と人のダイアログ フリードリヒ・モネ、ゴッホからリヒターまで」展と「ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリーン美術館展」(10月8日～1月22日)などである。なかでも、日本ではあまり知られていないベルクグリーン美術館のピカソとクレーのコレクションには瞠目すべきものがあつた。



「静嘉堂@丸の内」ホワイエ 撮影：株式会社 TOREAL 藤井浩司

2021年度と2022年度の入館者をみる ～石川県の一例から～

的場久良 (まとは ひさよし・石川県七尾美術館)



いまだ全国的美術館に大きな影響を与え続けている「新型コロナウイルス感染症」。2020年以降、繰り返し発出された「緊急事態宣言」や「蔓延防止等重点措置」により、そのつど博物館施設へ「休業要請」が行われてたびたび臨時休館に追い込まれた。その流れは翌2021年も止まず、展覧会やイベントが軒並み中止となり全国的美術館が深刻なダメージを負った。せっかく膨大な時間と経費を費やして準備してきた各事業があえなく「キャンセル」の憂き目にあい、無念の涙を飲まれた関係者はさぞかし多いことだろう。

しかしながら、2022年を迎えたあたりからその状況に少しずつ変化が生じてきた。「コロナ禍」にあるのは相変わらずながら、感染者の拡大期にも行動制限措置は発出されず、対策も緩和傾向が顕著になってきている。2021年度までと2022年度では明らかに様相が異なり、それは美術館においても同様だ。一見すると、ようやくにして「通常」が戻ってきたようにも感じられる。

では実際のところ、来館者は回復しているのだろうか。石川県内の当館を含めた美術館5館における、2021年と2022年双方の春～秋季(4月～9月)における入館者数をととして簡単ながらみてみたい。

ちなみに2021年度、石川県では博物館施設に対して2度にわたり「休業要請」が出されている。1度目は「石川県緊急事態宣言」発出によるもので、期間は5月12日から6月13日までの33日間。

そして2度目は「蔓延防止等重点措置」により、8月2日から9月30日までの60日間にもおよんだ。一方で2022年度については、現時点(2022年10月段階)で「休業要請」は発せられていない。

まずは事例その①。石川県の中心地たる金沢市に所在する石川県立美術館からである。同館では2021年度の入館者(数字は「コレクション展」鑑賞者数)は9,289人であった。なお同時期、合計83日にも及ぶ臨時休館により春季・夏季の特別展も会期が大幅に短縮されている。一方2022年度は22,964人で一挙に約2.5倍の増加だ。各展覧会が予定会期を全うできたことや、金沢市に多くの観光客が戻ってきたことなどによるのだろう。さすがは観光都市・金沢の面目躍如といったところか。

事例その②は加賀地方より石川県九谷焼美術館。同館での2021年度入館者は4,691人で、臨時休館は計24日間。そして2022年度は6,932人で約1.5倍の増加である。増加率はほかの施設に比べて緩やかなものの、それは臨時休館の日数が他館より少なかったことや、コロナに関係なく常に一定数の入館者が確保されていることの表れとも取れよう。

事例その③は奥能登地方より石川県輪島漆芸美術館。2021年度が4,091人で臨時休館は75日間だ。それから2022年度は10,053人と倍増している。展覧会が予定どおり開催できたことが一番だろうが、輪島市が奥能登観光の拠点にあたり、金沢市と同じくこちらも観光客の動向が反映された

ためと思われる。

事例その④は、当館と同じ中能登地方の七尾市に所在する石川県能登島ガラス美術館。同館の2021年度入館者は6,926人。臨時休館は計93日間で、夏の特別展「本郷仁 風景装置」や秋の企画展「吉祥 中国清朝のガラスと祈りの文様」が会期を大幅に短縮されたことにより、入館者がずいぶん落ち込んだ。ことに「本郷仁展」の、予定の半分にも満たない会期で終了せざるを得なかったのが響いた形である。一方2022年度は24,403人で、一挙に4倍増となった。同館は観光スポットの能登島に立地するため、観光客の来館傾向が強い。本例も他館と同じく、いかに臨時休館や行動制限の影響を被ったのかを物語っている。

そして最後の事例は、僭越ながら当館のケースについて。まず2021年度の入館者は5,212人。春の特別展「長谷川等伯展」が途中打切で、また夏の特別展「歌麿とその時代展」は、「休業要請」の期間と展覧会の会期がまるまる重なり「完全中止」となった。臨時休館は76日間である。そして2022年度の入館者は14,089人で、約3倍の増

加である。当館の場合、やはり春の「長谷川等伯展」と夏の特別展という、当館にとって中核的存在である両展覧会が予定どおり実施できたのが大きかった。

以上、石川県内の5施設における来館者数を見てきた。幅の大小はあるものの、いずれも増加傾向だ。両年度の開館日数が異なるので当然といえば当然ではあるものの、来館者が確実に戻りつつある状況なのは嬉しい限りだ。むろんそこには各館の関係者たちによる、不断の努力あつてのことであるのは改めていうまでもない。

「コロナ禍」はまだまだ続きそうである。だが今後でもできる限り各事業を継続開催し、「コロナ禍」以前の水準回復を目標に、多くの方々に来館いただけるべく励みたく思う。なお本稿作成に際し、入館者の情報をご提供いただいた美術館各位に対し、心より御礼を申し上げる。

それから本来は「北信越ブロックの報告」とすべき本稿であるが、石川県内のみのさらに限定された地域での内容となってしまった。最後にお詫びさせていただきたい。



石川県七尾美術館「長谷川等伯展」(2022年度版)会場風景

展示の変化

田中善明 (たなか よしあき・サイトミュージアム)



東海地方の2022年度上半期は、表現の自由をめぐって全国的に注目されたあいちトリエンナーレが立ち消えにならず、続けて開催されたことが何よりの出来事であった。人類を脅かす感染症が発端となって、より人間の存在についての問いかけを強めたこの芸術祭の内容については、他にもいろいろと取り上げられているのでここでは控えさせていただきます。

美術館の職員もこの2年以上の期間、感染の不安や生命の危険を感じながら、外出の制限により企画展調査や出品交渉を停滞させざるを得ない状況となった。これほどにまで出張がなかったのはいまだかつてなかった。企画展を中心に自転車操業で次から次へと準備に追われ、イベントをこなしていた日常が突然寸断された。しかし、このことで美術館の新たな動きもいくつか芽生えてきたように感じられた。たしかに、中止にともなう手続きや他部署への応援など、別の忙しさは生じたものの、この期間はまだこれまで手を付けられていなかった所蔵品の見直しをする絶好の機会でもあったのだ。1980年代前後の美術館建設ブームからすでに数十年が経過し、開館当初からの生え抜きの学芸員がほぼいなくなった。当時館長や学芸員が収集に関わった収集作品、特に彼らと同世代の作家の作品については特別な思い入れや、やり取りがあったはずである。それらもうまく伝わっていない場合が多いし、そもそも潤沢な購入費のあった時代に大量に収集された作品は、その後の詳細な調査もコンディションの改善も十分に進んでるとは言えない。

そうしたことと直接関係があったのかどうか詳細はわからないが、名古屋市美術館では東山動物園猛獣画廊壁画修復の中間報告が常設展示のスペースで行われていた。第二次世界大戦中に殺処分などで激減した動物園の猛獣類がいない寂しさを補うため、中京新聞社が提唱し画家の太田三郎、水谷清、宮本三郎が壁画を埋める巨大カンヴァスに猛獣とその猛獣が生息する自然風景を描いたが、役割を終え同館収蔵となったそれらの作品は損傷が激しく、寄付を募りながら修復が進行、その報告展示であった。三重県立美術館でも多田美波の巨大陶壁画《曙》の修復方針立案のために制作過程の調査などが近年行われ、その報告が展示されていた。積み残してきた課題の一つである作品のメンテナンスについて、その過程をオープンにし修復方法がはたして最適であるのかどうかの検証の機会を設け、かつ美術館活動の一つである「保存」を知ってもらう展示の意義は大きい。

新たな方向性としてもう一つ感じた変化は、展覧会キャプションの作品解説である。美術館にとっての作品解説はさまざまな意図がある。作品の説明が却って視覚的に邪魔をしたり鑑賞者と作品との対話を減らしてしまったりする心配も十分に意識してなのだろうか、ヤマザキマザック美術館の常設展示は音声ガイドが主体で、企画展「新野洋×西澤伊智朗 自然を創る」(4月22日～8月28日)においても解説は極力絞った文字量で伝えたい言葉を厳選し、所蔵作品との関係性などが語られていた。桑

山美術館は毎年春と秋に所蔵品を主とした企画展が開催され、春は前年中止となった来館者投票によるリクエスト展で、速水御舟の初期作品などが展示されていた。同館の作品解説は、作家解説、技法解説、作品に描かれた装いの説明等を散りばめながら、作品の重要な部分に眼が行くような、自発的に絵画を鑑賞してもらうための工夫が凝らされている。知識欲を満たす説明サービスがある一方で、解説を作品と照らし合わせて確認するだけの鑑賞にはしたくないとの思いが感じられた。投票をした来館者の短い感想複数枚を作品の手前に掲示していたのも、鑑賞の多面性を理解してもらうための工夫であらう。名都美術館の「上村松園と伊藤小坡」展(4月5日～5月29日)も、特殊な展示室構造でありながら二人の作家を同時並行的に見せつつ、1点1点に付された作品解説に心がこもっていた。新収蔵の松園は、常にアンテナを張っていないと入手できない作品で、地道な取り組みが伺えた。

近代の輸出陶磁器を紹介する横山美術館で開催された「細密の世界で魅了した 七宝の美」展(4月29日～7月24日)は、常設の一区画で展示され

ていた七宝工芸品の規模を大きく上げた企画展で、日ごろの展示作品が収蔵品のほんの一部であることが理解できた。作品の特色などをコンパクトにまとめた解説は読みやすく、釉薬などの素材サンプルや製造工程や当時の写真を置くことで多角的な視点を提供していた。

港まちポットラックビルの「パンク!日常生活の革命 名古屋」展(8月26日～11月12日)は巡回展ながら、「橋の下世界音楽祭」など東海地区との関りを加えての開催で、パンクロックの世界的な動向を紹介しつつ解説はパンクに対する愛に溢れながらも決して美化しないところに好感が持てた。

来館者に対して、友人に語りかけるかのような文体が現代作品の説明を中心に増えてきたように思える一方で、近代や近世作品では作品に対する愛がにじみ出ている解説が多くなったと感じている。この流れは、美術館に経営的な視点、美術作品に共感を持ってもらうための取り組みとして意識されてきたのだろうが、それだけではなく作品と向き合う時間が少し取れたことも関係しているのではないと思う。



サイトミュージアムの作品とキャプション
QRコードは写生地をグーグル・ストリートビューで訪問するためのもの

関西 現代美術の潮流をたどるタイムトリップ

中山摩衣子 (なかやま まいこ・京都市美術館)



コロナ禍もはや3年目となり、感染者数が劇的に減ったわけでもなく、マスクをつけずに生活できるようになったわけでもないが、収束に向かっていくような雰囲気が漂っている。紅葉が盛を迎える直前の京都は、修学旅行生を乗せた観光バスが走り、明らかに観光客が増えた。なかでも、外国人観光客の増加が著しい。10月11日に水際対策が緩和されたことが大いに影響し、秋の京都を満喫するグループをよく目にする。着物で歩く若い女性はコロナ禍でもしばしば見かけたが、観光で訪れたであろう外国人家族が着物を着用しているのには驚いた。コロナ禍以前は当たり前だったのかもしれないが、ここ数年目にするのなかつた光景の一つかもしれない。

当館のリニューアル後はコロナ禍とともにあったといっても過言ではないが、収束の気運を受けて急ピッチで館内のサイン類を見直し、外国語表示を増やしているところである。遅れてやってきた、コロナ禍以前に想定された館運営となるのか、今はまだわからない。当初は、外国人観光客の来館を見越して、コレクションルームで京都画壇を中心とした四季折々の名品展を想定していた。英語、中国語、韓国語を完備した音声ガイドも導入し、準備万端であった。しかし、外国からの観光客はおろか国内の集客も見込めなくなったことで大きく方向を転換し、メンバーシップ会員をはじめとするリピーターを想定して、今年度から特集展示と題した小企画を含めた常設展示を行っており、わたし自身を含め、

リニューアル前後に入った学芸員にとって、所蔵品の調査・研究に取り組む好機となっている。外国人客が多勢となった場合、再びの方向転換となるのか。コロナが本当にこのまま収束するのかかわからないうちは、その方針も定まりそうにない。

さて、近畿ブロックの2022年上半期である。大阪市立美術館が大規模改修工事を行うため、長期休館に入った。「大阪・関西万博」が開催される2025年に再開館の予定である。近畿ブロック全体の起爆剤となるよう期待して待ちたい。

展覧会については、関西の現代美術をとりあげた企画展がたて続けに開かれたということに触れたい。それぞれの展覧会を開催順で並べると過去へと遡っていくことになり、さながらタイムトリップである。まずは、兵庫県立美術館開館20周年「関西の80年代—今、ふりかえる関西ニューウェーブ」展(6月18日～8月21日)である。同館の前身である兵庫県立近代美術館が開催していた「アート・ナウ」で示された動向を軸に構成された展覧会だった。80年代の関西といえば「関西ニューウェーブ」だが、その範疇におさまらない仕事も含めて広く提示し、10年という単位で切り取った関西アートシーンの断面が提示されていた。室内は来館者の撮影が可能で、若くは学生グループが熱心にスマートフォンで撮影している姿が印象的だった。その時代が持つ熱気のようなものを体現したパワフルな作品群は若い世代の目にも新鮮に映ただろう。圧倒されたのは再制作されたKOSUGI + ANDO (小杉

美穂子・安藤泰彦)の《芳一—物語と研究》である。1987年の京都アンデパンダン展に出品された本作は、室内上部に設えられた窓枠と迷路のように配された鏡と屏風に書かれた文字で『耳なし芳一』の物語世界をインスタレーションとして成立させていた。同展の出品作家でもある森村泰昌が当館で開催した「森村泰昌：ワタシの迷宮劇場」展(3月12日～6月5日)で行ったサウンドインスタレーション《影の顔の声》が頭に浮かんだ。こちらは森村が紡いだ物語の世界観をいくつかの道具立てによって表現するというもので、大枠のフォーマットは前者と共通しているが、音楽だけでなく、音や光、匂いといった要素までが演出され、森村以外にも多くの作り手が関わる大仕掛けである。どちらがより物語に肉薄していたかということを知りたいわけではない。しかし、ある物語を表現するときに、その手段が乏しい草創期といくらでも選択肢がある現在の状況と、どちらが美術にとって豊かな時代だったのだろうかと考えさせられた。

次なる時点は、1972年である。西宮市大谷記念美術館 開館50周年記念 特別展「Back to 1972 50年前の現代美術へ」(10月8日～12月11日)は同館が開館した年にフォーカスし、展示さ

れている作品は基本的に1972年に制作されたものに限られる。写真や版画が充実しており、そのジャンルの担い手たちが新たな表現方法を模索しているさまがよくわかった。また、同年は吉原治良の没年でもある。具体美術協会の活動については1970年の大阪万博を頂点とし、吉原の死を以て解散となるが、その終焉への軌跡に一章が割かれていた。

そして、大阪中之島美術館 国立国際美術館 共同企画「すべて未知の世界へ—GUTAI 分化と統合」(10月22日～1月9日)である。具体の活動拠点「グタイピナコテカ」があった中之島に建つ二つの美術館が共同で行う初の具体の展覧会である。共同企画といってもそれぞれ切り口は異なっており、必ずしもわかりやすい内容ではない。80年代とは違って具体の活動はすでに歴史化されている。具体という団体の多様性を改めて提示することが目的ではなく、新たな世代がその実態を読み替えようとする意欲的な試みと捉えるべきだろう。余談だが、当館も国立美術館と隣接している。岡崎を舞台にした共同企画の展覧会開催がありうるのだろうか少し考えたことも書き添えておく。



兵庫県立美術館開館20周年「関西の80年代—今、ふりかえる関西ニューウェーブ」展 会場風景
KOSUGI+ANDO (小杉美穂子・安藤泰彦)《芳一—物語と研究》1987/2022年 撮影：高島清俊

「アフターコロナ」の地方とアート

佐々木千恵(ささき ちえ・倉敷市立美術館)



パンデミック以降、コロナのダメージを最も受けたものの一つが観光地で、筆者の所属する美術館近くの倉敷美観地区は静かなものだった。2022年夏以降賑わいが戻りつつあり、さらにこの頃ではコロナ疲れの反動か以前にも増して人出の多さを感じる中、これまで自粛されてきたアートイベントが各地で活発に行われている。本稿ではコーナーの趣旨から些か外れるが、岡山県内、美術館の外側の事業について述べたいと思う。

岡山県内のアートイベントは、「アートプロジェクトおかやま」の一環として岡山県の主催、或いは委託によるものが多数ある。このプロジェクトは県の文化の魅力を国内外に発信し、アートで地域を元気にしようとするのが主旨で、アートイベントや岡山県民文化祭、ウェブサイトによる県内の展覧会紹介など多岐にわたる。その背景としては2010年より始まった「瀬戸内国際芸術祭」により瀬戸内が注目されたことが大きい。2016年から岡山市内で国内外の現代美術作家を集めた「岡山芸術交流」が開催され、さらに地域とアートの結びつきに住民の注意が向けられることになった。

「アートプロジェクトおかやま」の事業で県主催の最も大規模なものと言えるのが、トリエンナーレ形式の「美作三湯芸術温度」で、2022年は第3回目の開催になる。この事業については本誌18号で、キュレーターである奈義町現代美術館・岸本和明氏により既に報告済なので詳細は割愛するが、第1回、第2回と県北3つの温泉地の施設

に設置された作品を巡る小旅行は、筆者にとってアートを鑑賞する以上に、ゆったり休暇を楽しむまたとない機会になった。また、作品が宿泊施設で喜ばれて継続して設置されるという話を聞くにつれ、温泉地だけにほっこり心温まった。

上記プロジェクトでは他に、アーティスト・イン・レジデンスもプロポーザル方式で委託し推進している。2022年に実施されたものとしては、参勤交代の宿場街で近世の家並みが残る矢掛町で、町内で産出される石を使い県内外の彫刻家が公開制作する「ザ・のみぎりズム2022」や、瀬戸内海のほぼ真ん中にある笠岡諸島にアーティストが滞在し、島の人々との関わりの中で制作する「笠岡諸島アートブリッジ2022 色と音のライブラリー」などが挙げられる。またその他に住民がアートイベントを計画・実施する「アートで地域づくり実践講座」や、「次世代おかやまアーティスト活動促進事業」などの多種多様な事業を県全域に展開し、アートによる地域の活性化に力を注いでいる。

さて、倉敷市ではこうした県の事業とは別に、観光やまちづくりのためのアートイベントが実施されている。ミュージアムやギャラリーが林立する美観地区だけでなく、近世に商業・文化が栄えた古い街並みを残す玉島地区や、塩業と繊維産業に支えられ現在はジーンズの聖地で知られる児島地区でも、ユニークな活動が展開されている。

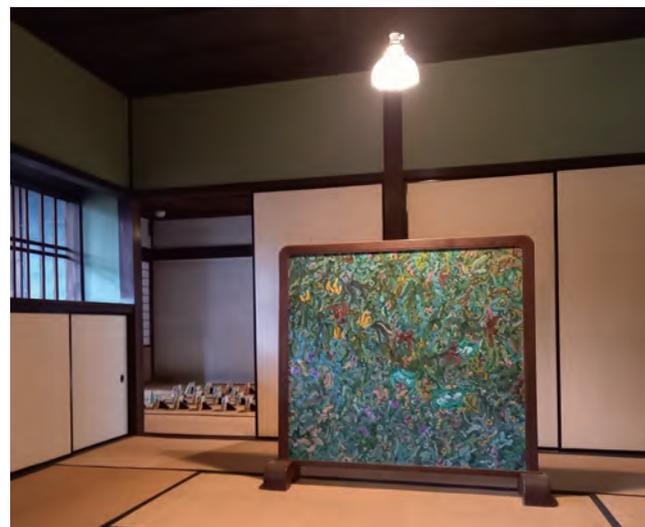
特に児島では児島観光港から瀬戸内国際芸術祭開催地の本島に船が出ていることもあり、2022

年「こじまブルーアートフェスティバル2022」が初めて実施された。このアートイベントでは岡山県新進美術家育成「I氏賞」受賞の作家達など、岡山ゆかりの作家が児島地区の6ヶ所に作品を展示した。フライヤーに「風光明媚な景色などをアートを通じて知っていただき、全国へ発信していくことを目的に開催」とあるが、倉敷在住の筆者は展示場所に行くために山頂まで登り、瀬戸大橋を眼下に見る絶景に「作品のおかげでこの景色を初めて見られた!」と感動しきりだった。

美術館学芸員としては素朴な感想だが、地方のアートイベントは観光客のためだけにあるのではなく、住民が作品と触れ合うことで、自分たちの住む場所の魅力を再発見するためにもあるのだろう。大型の国際展だけでなく、その地域で着実に活動する作家を紹介するアートイベントを、観光客に

経験してもらって地方の底力を印象づけ、住民にも作家を応援してもらおう。美術館の外にはこのような「アフターコロナ」における地方とアートの理想的な姿の一つが、発見されるのを待つ宝物のようにあるのではないだろうか。

最後に児島での特記すべき活動として、市の地域活性化事業として運営されている松島分校美術館について言及したい。瀬戸内の小さな島にあるこの施設は、廃校となった小学校分校を作家達を中心となって地域の人々と協働して再生されたもので、この地域ならではの文化やそこで感じたことを生かし、レジデンスなどの活動が行われてきた。近年コロナ感染拡大で活動が難しくなったと思われるが、コロナ後にはゆったりとした島時間の中で参加者の感性を養うイベントにより、地方とアートのあり方について新鮮な視点を示してくれるだろう。



「こじまブルーアートフェスティバル2022」会場の一つ旧野崎家住宅「秋季企画展 今昔礼賛」
写真は児玉知己作品

「生」でみること

四国地方の戦後美術／現代美術展 いろいろ

井須圭太郎 (いすけいたろう・新居浜市美術館)



四国には新幹線がない(ホビートレインはあるが)。東西に254km、南北に186kmの広袤を持ち、世界第50位の島面積を誇る四国本島をはじめ、大小626の島々により構成される四国地方(人口約372万人)の美術館における2022年度上半期の展覧会について、戦後美術／現代美術展を中心に、コロナ第7波の状況にも細心の注意を払いながら、軽自動車と在来線を駆使して実見した。

徳島県立近代美術館では、相生森林美術館の協力を得て「日本の戦後彫刻展」(7月16日～9月4日)が開催されていた。「人間像」をテーマに収集された同館の戦後日本の彫刻作品45点に、相生森林美術館の木彫コレクション12点を加えて、3つのテーマ(物語)により1950年代から2000年代までの彫刻表現の変遷を紹介。館藏品から戦後彫刻の歩みを辿れる程の充実したコレクションにも驚かされるが、そこに相生森林美術館の木彫作品が加わることで、素材の違いや表現の変化を比較・体感できる調和のとれた空間が生まれていた。特に1980年代前半に計画があった鈴木実、深井隆、舟越桂、藪内佐斗司による4人展(実現せず)の経緯をもとに、両館のコレクションから4名の展示空間を構成したトピックコーナーでは、「マスクを外せば様々な種類の木の香が漂ってくるのでは」と思うような、実体(作品)を前にした生々しい美的体験を得た。

香川県では、高松美術館(1949年開館・高松市美術館の前身)や、香川県文化会館(1966年開

館・香川県立ミュージアムの前身)において、早くから現代美術を鑑賞できる公の場(環境)があったと仄聞する。現在も四国外から多くの観光客を集める「瀬戸内国際芸術祭2022」の期間中に、香川県立ミュージアムでは「せとうちの大気—美術の視点」展(8月5日～9月4日)、高松市美術館では「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.11 フラジャイル—ひそやかな風景—」展(10月1日～11月6日)という二つの自主企画による現代美術展が開催されていた。香川県立ミュージアムでは、香川・瀬戸内ゆかりのアーティスト10名(展示順に矢野恵利子、三村昌道、水谷一、北村大樹、得丸成人、浅見貴子、宮武かおる、藏本秀彦、南条嘉毅、宮脇慎太郎)に制作を依頼し、それぞれの表現から“せとうち”のイメージを再考する試み。「瀬戸内」という抽象的なテーマに対しての出品作家のアンサーは様々であったが、「陽光降り注ぐ温暖な多島海」といったステレオタイプな提示は皆無で、次々と個々の作品が視界内で繋がりをみせる展示構成も相俟って、むしろ「イメージなんて人それぞれ、で良いのでは?」ということを強く感じさせる清新な場と体験となった。

一方の高松市美術館の展示では、フラジャイル(こわれやすい・繊細な)をテーマに、本田健、稲崎栄利子、赤松音呂、北野謙、諫山元貴の5名による個展形式での構成。各室ゆったりとしたスペースで、それぞれの作家の「いま」が提示されており、あらためて「作品空間の中に入り込む」という現代

美術の醍醐味ともいえる愉しみを存分に味わうことが出来た。

高知県立美術館では、没後初となる大規模回顧展「合田佐和子展 帰る途もつりもない」(11月3日～1月15日)が開催されたが、本稿の期日には間に合わず、未見。なんとか締切の間に「角田和夫 土佐深夜日記—うつせみ」展(10月29日～1月9日)を実見した。高知ゆかりの作家を紹介する「ARTIST FOCUS」の第3回となる同展では、南国市在住の写真家・角田和夫が赤外線フィルムによって撮影したモノクローム写真のシリーズ3作から、1980年代とコロナ禍2020年代の高知の「夜の街」の深淵な世界を伝えていた。特にタイトルにある「土佐深夜日記」シリーズでは、ゲイバーに勤める叔父と周辺の人々の「生きざま」が赤外線フィルターの効果により、きわめて生々しく写し出されていた。正直に「心地よい気分」とはならない複雑な感情を持つ表現もあったが、同時に、生きづらさや多様性の問題が社会の中で注目される現今、公立美術館として同展を開催することの意味深さと強いメッセージ性を受けとめた。

最後に愛媛県。愛媛県美術館では「みる冒険 ゆらぐ感覚」展(8月6日～9月30日)として、光島貴之と八木良太の近作を中心に、館藏品も交え

て、五感を通じて「みること」を再考する試みがなされていた。さわる絵画(光島)・ヘッドホン装着して聴く・歩く(八木)というパブリックスペースにおける接触的な鑑賞体験は、2020年以前の隔世の記憶を呼び起こさせるような、解放的な知覚をもたらした。町立久万美術館では「SATO Kei: a Wonder 怪物 佐藤溪展」(5月28日～9月11日)を開催。監修に榎木野衣氏を迎え、同館コレクションの出自とも不可分な美術評論家・洲之内徹との関わりから、放浪の詩人・画家、佐藤溪の深奥に迫る濃密な展示を実現。筆者が勤務する新居浜市美術館では、開館後初めてとなる現代美術の企画展「あかがねアート・クロッシング 'home」(9月10日～10月10日)を開催。地域ゆかりの現代美術作家・日野譲と伴野久美子によるクロスオーバー型の二個展として1,778名の来場者数であった。

ここまで、総移動距離約1,300kmをもって、2022年度上半期の四国ブロックの戦後美術／現代美術展の動向の一端を報告した。地方では、気軽に「ギャラリー街をひと回り」とはいかないが、足をつかって、現場で「生」でみることからしか得られない体験を、2023年はより多く持てる時勢が来ることを、切に願っている。



新居浜市美術館「あかがねアート・クロッシング 'home」展 会場風景
(中央) 日野譲 作品 (壁面) 伴野久美子 作品

そこに積み重なるもの
(は時も場所も越えて)

佐々木奈美子(ささき なみこ・久留米市美術館)



コロナ禍で一切がストップした2020年から、自主判断のもと活動の可能性をギリギリまで探った2021年を経て、2022年度に入ると日常が戻り始め、美術館の展覧会活動もほぼ復調したかの印象があった。とはいえ、全てが元の状態となったわけではないことは、ふとした瞬間に感じられた。

たとえば、国内の美術館の所蔵作品の魅力を再検証する動きが目につくようになった。長期休館中の美術館がまとめてコレクションを他館に貸し出すケースはこれまでもあったが、美術館を取り巻く今日的状況が、他館の所蔵品をもとに新たなストーリーを紡ごうとする企画を推進したのだとすれば、これは良い方向への変化に思える。大分県立美術館の「国立国際美術館コレクション—現代アートの100年」展(6月11日～8月21日)のような大規模な招来があった一方、岡山県立美術館での「岡田三郎助と佐賀ゆかりの美術—佐賀県立美術館優品選」展(9月28日～11月6日)、松本市美術館での「鹿児島市立美術館名品展」(10月8日～11月27日)の開催は、両館の充実したコレクションを知る九州の美術館の一員として心から嬉しい。もちろん、背景にはそれぞれが30年、40年と歴史を刻んできた館相互の交流と、作品理解や信頼関係の成熟がある。そろそろ私たちは、各地の美術館の果たしてきた役割や、歴代学芸員の仕事を再評価し、その意義や魅力を語り継ぐ時期にきているのではないだろうか。国内コレクションへの熱いまなざしを、一過性のものとして終わ

らせたくない。

昨年からは遠距離の移動も可能となり、ようやく遠方の作品に会いに出かけられるようになった。前年の予定が2022年に延期された8回目の越後妻有の「大地の芸術祭」にも行けた。滞在期間が短かったのでツアーに参加し、知り合った方と胡瓜をかじり、ボルタンスキーをめがけて走るなど満喫したが、その楽しさには、同じ場所にいた過去の色々な自分が一緒になってワイワイしているような不思議な感覚があった。20年分の積み重なりがそこにあった。

その勢いで、国東半島の美術めぐりのバスツアーにも申し込んだのである。神も仏も受け入れる土地、大分は、大らかに未知の美術も迎え入れてくれる。何かに迷ったら、とりあえず大分のどこかに行って作品を作るのが良い。今回のツアーは、途中、長崎鼻リゾートキャンプ場(豊後高田市)で「不均質な自然と人の美術館」に寄り、鴻池朋子の《One Wild Day》と一緒に視界いっぱい広がる空を眺めるなど、丸い国東半島に点在する作品を反時計回りに追いかけてながら光と風を感じるコースだった。最後は別府の中心市街地で、「塩田千春展『巡る記憶』」(8月5日～10月16日)の糸に絡め取られる趣向である。中華料理店や、浴槽っぽいもののある室内など、かつて人が出入りしたであろう場所で、時間が宙づりにされていた。記憶の集積がここにもあった。

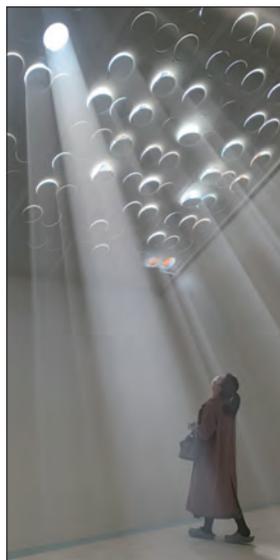
「不均質な自然と人の美術館」では、福岡を拠

点とする anno lab (あのラボ) が手がけた「テクノロジーによる自然讃歌」ともいべき作品を見ることができた。その中の「太陽と月の部屋」は第25回の文化庁メディア芸術祭のアート部門の大賞受賞作。明るく霞む室内で自然の光が形を結んでは消え、つかめないのはわかっているのに、思わず手を差しのべてしまう。メディア芸術祭はこの第25回でひと区切りとのこと。長期間の継続に敬意を表したい。

行橋市の増田美術館に「トナー・カボチャラダムス」展(7月2日～9月4日)を見に行った時には、ちょうど「第4回ゆくはし国際公募彫刻展(ゆくはしビエンナーレ2023)」の市民賞&子ども大賞の審査が進行中で、応募作から選ばれた入賞作品のマケットが図書館に置かれ、市民が自由に投票できるようになっていた。「公共空間に設置するにふさわしい知識・知性を具現化した歴史上の人物」というテーマに沿った44点の応募作から入賞した5点は日本人2名とギリシャ、ウクライ

ナ、スペインの作家によるもの。先立つ市長選ではこのビエンナーレの存続検討も公約の一つにあげられていたと聞く。結局、第4回で終了が決まり、最後の大賞となったウクライナの作家ヴォロディーミル・コチュマルによるフリーダ・カーロの像は、今年、過去3回の大賞作と同様に市内に設置されることになる。

終わりの始まりも、全ては積み重ねられていく。2015年に始まった「アートフェアアジア」は7回目となる昨年、初めて福岡市との共同開催となった(9月30日～10月3日)。コロナ禍でもアート市場はよく動き、福岡も活況だったと聞く。マーケットと一般の文化活動が必ずしも連動するわけではなく、市民に広く芸術を体験してもらうために「公」の果たす役割は今も大きい。「Fukuoka Art Next」を推進する福岡市の活動に今後も注目し、傍にいる自分の中にこれから何が積もっていくのかを見届けたい。「集客」と同じくらい大切な、「集積」をはかる指標はないものかと考えながら。



anno lab「太陽と月の部屋」(不均質な自然と人の美術館内)



塩田千春《巡る記憶—中華圏》2022年

保存研究部会

盛本直美（もりもと なおみ・岩手県立美術館）

保存研究部会では年2回の会合を部会員の所属館で開催し、毎回特定のテーマを設定して、外部講師を招いての講演会や、部会員による事例紹介・意見交換などを行っている。2020年度以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により対面会合が実現せずにいたところだが、8月9日と10日に、感染症対策のもと、約2年半ぶりとなる会合を開催した。以下、福岡市美術館にて行われた第56回会合の概要を報告する。

1日目は、光明理化学工業株式会社の山崎正彦氏をお招きし、「美術館における空気環境調査と対策」と題して、美術館における空気環境の調査と対策について、同社開発の北川式ガス検知管を使用するの実技を含めて、ご講演いただいた。ガス検知管については、開発史からその原理と構造、また、同じく美術館の環境調査に使用されるパッシブインジケーターとの比較、実際の測定法の解説をいただいたほか、化学吸着材やバリテック（アルミ材）といった製品による、展示ケース内の有毒ガスの低減方法などについてもお話いただいた。一方、実技としては、合板やコーキング剤、養生テープなどを用い、実際に有毒ガスの測定を行ったほか、質疑応答では、検知管のメンテナンスなど、具体的な話題に及び、参加者の関心の高さがうかがえた。

2日目は、今会合の企画幹事、渡抜由季氏のご案内

内で、2019年にリニューアルオープンをした同館バックヤードを見学させていただいた。古いものでは紀元前の遺物から現代美術まで、多彩な美術作品、約16,000点におよぶ同館のコレクションを保管する6つの収蔵庫や、素晴らしい修復室、またトラックヤード周辺の倉庫や設備など、興味深く拝見した。幅広いジャンルの作品の保全はもちろん、館内で働く職員のことを考え抜いた工夫がそこかしこに見られ、保存担当の渡抜氏のご苦労がしのばれるバックヤードツアーだった。

また同会合では、本年度、保存研究部会の担当となっている、第37回学芸員研修会に関して、テーマや今後のスケジュールについての話し合いを行った。部会員への事前アンケートに基づき、近年の災害多発から社会的関心が高まっていることや、専門家だけではなく、幅広い美術館職員の方々にも関心を持っていたり、決定、地震や水害など幅広い災害について取り上げることとした。

なお次回会合について、当初は学芸員研修会の打ち合わせを兼ねての開催を考えていたが、全体で協議すべき事項がないため中止とし、来年度の会合を早めに行うこととした。



第56回会合（福岡市美術館）



教育普及 研究部会

中村貴絵（なかむら たかえ・横須賀美術館）

教育普及研究部会では、毎年2回の会合を開催し、講演会や会員同士の意見交換を行っている。2022年3月22日に開催した第57回会合は、「美術館におけるSDGs（持続可能な開発目標）」をテーマに、講演会とディスカッションの2部構成で行った。

講演会講師には、日本科学未来館のプラットフォーム運営室長である谷村優太氏をお招きし、科学館におけるSDGsについてご講演いただいた。谷村氏は、全国科学館連携協議会の前事務局長として、日本のみならず世界の科学館におけるSDGsを推進した立役者でもある。講演の前半では、「国内外科学館ネットワークの取り組み」として、2017年に日本科学未来館で開催された「世界科学館サミット（SCWS）2017」における「東京プロトコール」採択や、世界科学館デーへの参画、さらには全国科学館連携協議会での取り組みについて紹介いただいた。ネットワークを生かしたシチズンサイエンスの普及や、国内外への情報発信は、いつだってシンプルでありながら、SDGsの達成に大きく寄与するものであり、既存のネットワークをどう生かしていくかが美術館にも問われた。講演後半では〈日本科学未来館の取り組み〉を紹介いただいた。ワークショップのオープンコンテンツ化や、既存の活動とSDGsとのつながりを可視化し職員同士で共有したり、

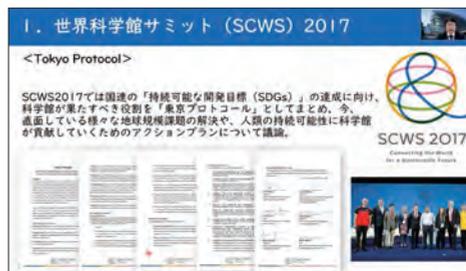
積極的に情報発信していくなど、SDGs＝達成すべきゴールと身構えるのではなく、既に達成できていることを再発見・再評価し、それを表明していく重要性を改めて確認することができた。また、質疑応答のなかで、取り組みを進めるにあたって、それ自体が持続可能であることや、活動の意義を明確にすることで取り組みの必然性と説得力がさらに高まるといったお話を伺うことができた。

その後、谷村氏の講演を受けて、「美術館ネットワークでなにができるのか?」「自身の館ではどんなことができるのか?」をテーマに、少人数での意見交換を行った（Zoomのブレイクアウトルームを利用）。既に取り組んでいる各館の事例紹介や課題、提案など、活発な意見交換が行われた。

見えない差異を可視化することがアート力であるならば、SDGsは、私たちができることを改めて考え、活動していくための一つのきっかけに過ぎないのではないだろうか。社会のなかで美術館の活動をより広く深く推進していくためには、その活動をより多くの人へ発信し、賛同を得て、発展させていくネットワークの構築が重要であり、全国美術館会議の更なるネットワーク強化に期待したい。



第57回会合の様子



情報・資料
研究部会

鴨木年泰 (かもぎとしやす・東京富士美術館)

情報・資料研究部会では前回の部会報告以降、2回の部会合を開催した。5月18日には第59回会合を対面とオンライン併用にて開催し、「美術関係アーカイブズ資料所在調査」ウェブ公開準備、ジャパンサーチ関連の情報共有、日本美術家連盟の著作権使用料規程改定に関する意見聴取への参加報告等が行われた(https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=87&d=124)。8月4日にはオンラインで第60回会合を開催した。前回に続きアーカイブズ資料所在調査のウェブ公開に関する協議を行い、新たな取り組みとして大阪中之島美術館の見学会を兼ねた部会開催の計画を検討した(https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=87&d=126)。

8月25日には内閣府と国立国会図書館が主催するオンラインイベント「デジタルアーカイブフェス2022—ジャパンサーチ・デー」(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/forum/index.html)が開催され、同イベントにおいて、新たに創設されたデジタルアーカイブジャパン・アワード(https://jpsearch.go.jp/news/20220715)を全国美術館会議が受賞したことが発表された。当部会が実務を務めるジャパンサーチへのつなぎ役としてのユニークな取り組みを評価されたものである。また、事例報告として部会幹事より全国美術館会議と東京富士美術館の事例を報告した。

2017年度から継続して取り組んできた「美術関係アーカイブズ資料所在調査」について、12月1日

に『全国美術館会議会員館 アーカイブズ資料所在一覧2022』(全美アーカイブズ一覧2022)として全国美術館会議HP上に公開を開始した(https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=93&d=20)。会員館が所蔵する美術関係アーカイブズ資料271件の目録をPDFとエクセル形式データで公開するもので、美術館が所蔵するアーカイブズ資料の一覧データとして日本国内で初めて公開される取り組みとなる。部会では今後の継続的な調査活動、情報更新のあり方の検討を進めていく予定となる。

今後の活動予定として、2月3日に大阪中之島美術館アーカイブズ情報室見学会を第61回部会合を兼ねて開催する予定である。コロナ禍以降久しぶりの見学会の計画となるが、アーカイブズ分野について先進的な取り組みを進める同館の事例を部会員一同で学び交流する有意義な機会としていきたいと考えている。

末筆となりますが、体調を崩して療養されていた越智裕二郎部会長が11月19日にご逝去されました。部会長からはご体調を崩される直前も、そして療養をされていたさなかも長らく宿題となっていた全美アーカイブズ一覧2022の公開をはじめ部会の取り組みや今後の活動について気にかけていただきました。本当に残念で言葉も見つかりません。心より部会長のご冥福をお祈り申し上げ、謹んで哀悼の意を捧げます。



第60回会合(オンライン)



デジタルアーカイブジャパン・アワード(DAJアワード)表彰状及びトロフィー

小規模館
研究部会

苫名真 (とまなまこと・市立小樽美術館)

コロナ禍による変則的な開催となった昨年度とは異なり、本年度は例年どおり、2回の事業を対面形式で行った。

まず、全国美術館会議の総会に合わせて開催する会合を6月3日に山梨県立美術館に会場をお借りして実施した。前年度主幹事館である掛川市二の丸美術館より令和3年度の活動内容・決算について報告があり、続いて、本年度主幹事館の市立小樽美術館が令和4年度の活動計画・予算案並びに幹事館の交代を説明し、いずれも承認された。

もう一つの、主幹事館を会場とする研修会・会合は9月13日、14日の2日間にわたり、市立小樽美術館で実施した。北海道での開催ということで集まりが心配されたが、全国各地の15の館と組織から25名の参加者を迎えることができた。

初日に行われた研修会のテーマは「地域との協働による芸術文化のまちづくり」。事例発表では苫名真(市立小樽美術館長)が小樽美術館の魅力と課題について説明を行った後、高野宏康氏(小樽商科大学グローバル戦略推進センター研究員)に「歴史文化

を活かした小樽の観光まちづくり」と題して、北前船をめぐる全国のつながりや豪商による美術家支援の話など小樽ならではの文化的伝統と現代の取り組みについて、駒木定正氏(北海道職業能力開発大学校特別顧問)から「近代建築史からみた小樽のまちづくりと未来」というテーマで、小樽・色内地区の歴史的建造物の紹介とそれらをどのように今後のまちづくりに生かしていけるかという話をいただいた。

2日目は会合(幹事館の交代、各館の近況報告)の後、心意気博物館、北一ヴェネツィア美術館、小樽芸術村、日本銀行旧小樽支店金融資料館、小樽市総合博物館など、近隣の文化施設を視察し、解散となった。

小規模館は設立母体も様々で、置かれている環境も異なり、今回のような課題に対しても共通の解決策は簡単には見つからない。しかしながら熱心な参加館が多く、結びつきはますます堅固になっている。困ったときには相談ができ、知恵を出し合えるこの関係を大切にしていきたいとあらためて認識した2日間であった。



第53回研修会(市立小樽美術館)



第53回研修会(心意気博物館)

美術館運営制度 研究部会

安田篤生（やすだ あつお・奈良県立美術館）

2022年の美術館運営制度研究部会(以下「MRG」)は、メーリングリストでの意見交換は行っていたものの、部会会合は前回(第35回、2021年12月7日)から1年間隔が開いてしまった。あいにく、第36回の部会会合はこの原稿の締切後に開く予定で(2022年12月2日オンラインにて)、今の時点では予定以外に書けることがない。

…と、ここで終わってしまうとあまりにも悲しいのだけれど、前回の本誌上報告(21号、p.26)でも、原稿締切日と部会会合開催日の関係で第35回会合の中身を報告できなかったのも、そちらをこの場でさせていただくことにする。

第35回会合は、第33回以来の対面形式による会合で、大阪市立美術館を会場に開催した。美術館の運営・経営が厳しさを増す中、設置主体・施設規模・地域性も様々な美術館の運営・財務状況の情報を集めて把握することとし、主にMRGメンバーの所属館の実態について情報共有を行った。公立館も形態の多様化(直営・地方独法・指定管理)でばらつきがあること、公益財団法人の私立館でも財源確保の手法に差異と工夫(=苦労)があること、規模・立地等の背景による違い、またコロナ禍の影響の大小など、様々な実状を確認することができた。ただ、設置者がいずれであっても(国立といえども)、限ら

れた財政資源の中で美術館活動を行う困難は共通していると言える。そのほか、美術館連絡協議会が巡回展の事務局事業から撤退することへの懸念も話題に上ったことを付け加えておく。特に地方の公立館にとって巡回展マネジメントの問題は看過しがたく、何らかの打開策が求められるのではないかという声もあった。

さて、これから開かれる第36回会合だが、今後のMRGの具体的な活動内容を固めるうえで、大きくは「2023年4月施行の改正博物館法」と「制定後10年を経過した美術品補償制度」の課題や問題点などについて意見交換をする予定である。またMRGの部会名称を変えてはどうかという声もある(以前も少し話題になった気がする)。さらに、メンバー陣容の拡充も問題となっている(部会名変更とも多少関連している)。

もう一つ付記すると、いささか私事で恐縮だが、唯一人幹事を拝命している私も2023年でいよいよ還暦、現職の任期は2024年3月末で終了というわけで(目指せ、年金繰上げ受給!?)、いつまでも幹事を続けていられる状況ではない。幹事の人選はともかくとして、メンバーの拡充(年代、地域、国公私立のバランスなど)は喫緊の課題であり、新たな方々の参加をお待ち申し上げる次第である。



第35回会合(大阪市立美術館)



第36回会合(オンライン)

地域美術 研究部会

重松知美（しげまつ ともみ・北九州市立美術館）

地域美術研究部会は、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針及び目標のもと、活動を行っている。

活動報告として、まず第36回学芸員研修会(2022年3月10日開催)がある。2021年度は当部会が企画担当となり「なぜいま、地域美術を研究するのか——「地方」への視点と地域美術研究の実践例」をテーマに開催した。三重県立美術館がホスト館となり、2020年度に続き、Zoomウェビナー形式で実施した。田中修二氏、佐々木奈美子氏、杉浦友治氏による3件の講演とパネルディスカッション、最後にウェビナー参加者との質疑応答を行った。参加申込242名と、全国から多くのご参加をいただいた。現在、『第36回学芸員研修会報告書』(2023年3月発行予定)の編集を進めているところである。

次に、部会合については、年に2回のペースで全国の各ブロックを巡り、発表と資料の実見などから、地域美術研究への理解を深める活動を行ってきた。第13回会合(2022年6月3日開催)は約2年ぶりの対面開催となった。総会に合わせて山梨県立美術館を会場に、「山梨ゆかりの作家について」をテーマに同館の太田智子氏、森川もなみ氏にご発表いただいた。同館平林彰氏もご発表準備をいただいていたが、事情により太田氏が代読と、ご自身の発表を行って

くださった。この場をお借りして三氏へ心より御礼申し上げます。まず平林氏の発表では、近代日本画から野口小蘗、近藤浩一路、穴山勝堂について、収蔵資料の特徴や収蔵経緯、そして研究成果としての展覧会と、それらの縁で更に寄贈へと繋がった事例をご発表いただいた。次に太田氏より、同館が山梨ゆかりの現代作家を紹介するための取り組みとして「山梨県新人作家選抜展」(1984～98)、「郷土作家シリーズ」(1988～2000)、そして「キュレーターズ・アイ」(2002～)の企画を続けてこられたことが紹介され、事例として栗田宏一・須田悦弘展(2020年度)について発表いただいた。最後に森川氏からは、発表時にはまだ準備中であった米倉壽仁展(11月19日～1月22日)について紹介。質疑でも、県内の美術団体や移住作家の活動に関する質問や、同館が2年計画で取り組んでいるアートプロジェクトの活動紹介もあり、活発な意見交換が行われた。次回会合については、2023年1～2月頃に対面開催を予定している。

今後の活動に関して、これまで当部会合にて発表いただいた研究事例について、何らかの形でまとめるかどうかという提案があった。地域美術研究に関する情報共有もまた、当部会に求められる使命の一つであり、アーカイブとしてどのようにまとめ発信するか、検討を進めていきたいと考えている。



第37回学芸員研修会(オンライン) 三重県立美術館にて配信の様子



第13回会合(山梨県立美術館)

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社 [出版業]

カトーレック株式会社 [一般貨物自動車運送業] 株式会社DNPアートコミュニケーションズ [サービス業]

株式会社伏見工芸 [展示装飾業] ヤマト運輸株式会社 [美術品輸送]

株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ [美術展企画等] 一般社団法人全国美術商連合会 [美術業界団体]
 有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク [展覧会企画制作] 公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団 [製造業]
 イセ文化財団 [芸術・文化振興] 大日本印刷株式会社 [総合印刷業]
 株式会社NHKエデュケーショナル [映像を中心とするコンテンツ制作] 株式会社東京美術倶楽部 [貸会場業等]
 株式会社NHKプロモーション [展覧会等のイベントの企画・制作] 凸版印刷株式会社 [製造業]
 株式会社加島美術 [美術商] 株式会社トップアート鎌倉 [額縁額装・画材]
 協同組合美術商交友会 [美術業界団体] ピープルソフトウェア株式会社 [情報通信業]
 株式会社グッドフェローズ [Webチケット販売、発券精算システム] 株式会社美術出版社 [出版事業]
 株式会社クレヴィス [展覧会企画・出版] 有限会社丸栄堂 [美術商]
 株式会社広済堂ネクスト [情報・印刷] 株式会社ユニークポジション [情報サービス業]
 金剛株式会社 [製造業(保管機器・銅製家具製造)] 株式会社レンブラント [画廊]
 進和テック株式会社 [ガス対策機器販売] 早稲田システム開発株式会社 [ミュージアム向けITサービス提供]
 せとうち美術館ネットワーク [運輸業]

アート印刷株式会社 [デザイン・印刷・出版業]

イカリ消毒株式会社 [サービス業]

M&Iアート株式会社 [美術商]

株式会社ギャルリーためなか [画廊]

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 [印刷業]

読売新聞東京本社 [新聞]

ライトアンドリヒト株式会社 [照明器具販売]

有限会社アート・フリース [グッズ制作・販売]

株式会社アートローグ [コンサルティング業]

影山 幸一 [アートプランナー]

株式会社学研プラス [出版]

株式会社求龍堂 [出版・デザイン業]

株式会社キュレイターズ [企画・デザイン・コンサルタント]

株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」[出版社]

株式会社丹青研究所 [サービス業(コンサルタント)]

株式会社TTトレーディング [HOGOS]

トライベクトル株式会社 [翻訳サービス業]

株式会社美術年鑑社「新美術新聞」[出版業]

IPMを取り入れた保存環境づくりと
虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



調査・診断

- ▼博物館・美術館・図書館・寺社等の環境調査
- ▼調査セットによる環境調査
- ▼昆虫や微生物の同定
- ▼生物の被害調査・診断

資格・認定



- ▼文化財虫菌害防除作業主任者
- ▼文化財IPMコーディネータ
- ▼文化財虫菌害防除薬剤等認定

コンサルティング

- ▼保存環境・防除薬剤

防除処置

- ▼殺虫・殺菌処理の受託
- ▼燻蒸効果判定

研修・普及



- ▼文化財の保存に関する研修会・講習会
- ▼図書の出版

公益財団法人文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F
TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp



文化財と人と環境を第一に。

文化財保存分野に参入してから40余年、守り続けたものがある。

長年の経験と実績により、博物館・美術館等それぞれの施設環境に
合わせた文化財IPM(総合的有害生物管理)プランをご提案いたします。

調査・診断

現状調査・診断/設計
原因究明・検査/分析

防除・メンテナンス

モニタリング
殺虫/殺カビ
IPM メンテナンス

その他サポート

教育研修支援
IPM 構築支援
関連商品販売



イカリ消毒株式会社 <https://www.ikari.co.jp>

本社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL.03-3356-6191 FAX.03-3350-1405
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL.06-6636-2741 FAX.06-6636-2720

最近の課題について

事務局長 山梨俊夫 (やまなしとしお)

今年度の総会后、6月から12月10日までのいくつかの課題について、現在の進捗状況を簡単にご報告いたします。

1. 一般社団法人日本美術家連盟が一任型で受託している作家の著作権使用料改定の件は、全国美術館会議（以下、「全美」）からの意見申し入れののち、連盟側が他の団体との折衝を済ませてから新たな著作権使用料を文化庁に上げて公表することになっています。連盟からの公表があり次第、皆様にお知らせしていきます。
2. 博物館法の改正に伴う事項です。今年に一部改正が実施され、登録制度に関しては民間会社が設置主体になっている博物館も登録可能になりました。その実際や登録申請に対する審査基準と審査制度の整備は今後の検討に委ねられています。また、文化審議会の博物館部会は、新たな体制がまだできていないのが現状です。学芸員制度の検討は、来年度以降の課題になり、現行制度の問題点の整理から始まります。文化庁の担当者が9月21日に事務局を訪れ、博物館法に関して全美としての要望書を提出してほしいと申し入れてきました。公益財団法人日本博物館協会が要望書を提出済みでしたので、それを参考にして、美術館の事情を考慮した全美ならではの要望書を作成すべきか、会長副会長と協議しました。文化庁が言う期日までに全美内で広く意見を募る時間の余裕がなかったため、事務局の原案を会長と徳川、逢坂、小坂諸氏3名の副会長にチェックしていただき、

それに基づいてさらに建昌会長、逢坂副会長と事務局とで協議を重ねて要望書を作成し、10月27日に文化庁宛に投函しております。要望書のおおよその骨子は、学芸員の仕事が多様化している状況に合うよう柔軟な枠組みで対応すること、非常勤学芸員が増大している現状を改善すること、デジタル化に関わる美術館活動への財政支援の充実、私立美術館への適切な税制措置などです。要望書はホームページに掲載済みなので確認していただければ幸いです。

3. 文化庁の事務局来訪時に、現行の国家補償制度を広い範囲で適応可能なように改善していく意向が表明されたので、事務局は、美術館運営制度研究部会と連携して、文化庁との意見交換の場を設定して全美の考え方を伝える方向を指向しています。この件については部会内で今後の行動を調整中です。
4. 現在、国立国会図書館（以下、「国会図書館」）から、美術館の図書室で今後展開される公衆通信サービスについて意見を求められています。これは、美術資料のコピーサービスをメールでできるように著作権法が改正されたため、美術館の適応可能性を調査すべく、国会図書館がつくったサービス内容の原案についての意見聴取です。この件に関しては、情報・資料研究部会幹事と事務局で全美の見解の取りまとめを行っています。

5. 9月の時点で、事務局から正会員の皆さまに美術館の実情調査に関するアンケートを発信しました。現在約65パーセントの回答をいただき、事務局で集計中です。結果がまとまりましたら、別途お知らせいたします。このアンケートは、美術館の実態の概略を把握することと、賛助会員を増やすことを目指し、併せて正会員、個人会員に対して無料入館がどこまで可能かを調査することを目的としています。

近年全美の活動は多様になり、コロナ禍のもと

でオンライン会議等を活用するなど活発です。活発な活動を支えていくためには様々な経費が必要となります。また法人化に伴って独立した事務局を将来に亘って十分に維持していくためにも財政基盤を安定させなければなりません。事務局としては、会長を始め皆様のご協力を得ながら、この難しい課題に取り組んでいます。それとともに、法人化により事務局内部の規則をはじめ各種の規則を整える必要があります。その都度、必要に応じて皆様にお諮りしますが、こうした作業へのご協力をなにとぞお願い申し上げます。

専門委員会から

広報委員会より

広報委員会副委員長 尾崎信一郎 (おさき しんいちろう・鳥取県立美術館整備局)

ホームページと機関誌『ZENBI』を通して、全国美術館会議の広報面を担う広報委員会より部会報告に準じていくつかの報告とお願いを書き留めておく。

本年度、ホームページに関してはいくつかの課題となっている作業について随時オンラインで協議を続けてきた。コアメンバーはそのほかにも必要に応じてオンラインで協議を交わしており、12月6日の研究部会幹事会の直前にも事務局を交えて情報共有の会議を開催した。機関誌に関しても順調に22号と23号を発行した。対面とリモートを交えて8月6日、8月18日と12月24日に編集会議を開いた。24日は校正作業が中心となることから、2023年2月にも次号の内容について協議する予定である。ホームページと機関誌、それぞれの担当者が会議を開く際には他方の担当者も参加して広報担当全体としての調整を行っている。またこれまでどおり、総会、理事会にはいずれかの担当者が陪席して、会議のレポートをホームページに掲載するようにしている。

ホームページについては広報委員会の設置に伴い、ホームページのレイアウトを修正したほか、要綱や組織図等必要な情報を追加した。今年度の総会で承認された個人会員、賛助会員の閲覧制限の解除については現在作業中である。今後は、研究部会同様、専門委員会の活動報告を掲載する予定。また、各委員会や部会と連携し、ホームページの内容を更に充実させていきたい。機関誌に関しては22号より編集担当としてもう一人、金沢21世紀美術館の池田あゆみさんが加わり、主に3人体制で編集作業を行っている。前号でもお伝えしたが、今回より全美フォーラムへの投稿の資格を個人会員、賛助会員にも広げた。残念ながら今号には個人会員、賛助会員からの投稿はなかったが、今後、活発な投稿がなされることを期待したい。前回は記したが、ホームページと機関誌の円滑な運営、発行に関しては全国美術館会議会員をはじめとする関係者の絶えざる関心と協力が必要である。引き続き皆様の支援をお願いしたい。

「大災害時における連絡網」について

災害対策委員会副委員長 貝塚 健 (かいづか つよし・石橋財団アーティゾン美術館)

第22号に続いて、災害対策委員会が誌面をいただけることになり感謝している。前号では、邊牟木尚美委員（国立西洋美術館）が、2022年5月31日に全国美術館会議公式ウェブサイトにアップロードされた「緊急時のための常備資機材リスト」について、その概要と作成の経緯を紹介した。今号では、「大災害時における連絡網」（以下「連絡網」）について、あらためて正会員のみなさまにその重要性和役割を訴えたいと思う。

2022年11月18日、ウェブサイトで、以下のような新しい連絡網の広域ブロック本部館と副本部館が発表された。2022年春から交替を進めて半年かかったのだが、半数以上は留任である。

北海道ブロック	本部館：北海道立近代美術館 副本部館：札幌芸術の森美術館
東北ブロック	本部館：福島県立美術館 副本部館：岩手県立美術館
関東ブロック	本部館：神奈川県立近代美術館 副本部館：栃木県立美術館
東京ブロック	本部館：東京都美術館 副本部館：東京国立近代美術館
北信越ブロック	本部館：新潟県立近代美術館 副本部館：富山県美術館
東海ブロック	本部館：三重県立美術館 副本部館：愛知県美術館
近畿ブロック	本部館：兵庫県立美術館 副本部館：国立国際美術館
中国ブロック	本部館：島根県立美術館 副本部館：岡山県立美術館
四国ブロック	本部館：徳島県立近代美術館 副本部館：愛媛県美術館

九州ブロック 本部館：福岡市美術館
副本部館：宮崎県立美術館

それぞれの任期は原則2年で、2024年総会時までこの体制を継続していただくことになっている。お引き受けいただいた美術館には心よりの感謝と敬意を表し、他の会員美術館のみなさまにはぜひ本部館と副本部館を支えることをお願いしたい。

阪神淡路大震災や東日本大震災などの教訓の一つは、将来だれにでも必ず襲ってくる大規模自然災害に対し、平時から対策を立てておくことの大切さである。これまでいくつかの被害調査報告がつくれ、それらをもとに各美術館で積み上げられてきた地震対策は、20世紀末のものより格段に向上した。最早、地震動だけで被害を受けたのならば、それは例外的な不幸ともいうべきものである。しかし、物理的な震動対策だけでは事は済まない、ということはこの20年で美術館は学んだ。2011年の東日本大震災は、地震の揺れよりも津波と塩水害による被害が大きかった。その後も、「観測史上最悪」という言い回しを聞き飽きたほど、大量の降雨による水害が頻発している。巷間で言われるように、温室効果ガスによる地球温暖化の影響が大きいのだろう。ヴァンダリズムを含め、想定し対処すべき災害の種類は明らかに増えている。

全国美術館会議の災害対策委員会は、有事に機能すべき工夫を重ねておくこと、いわば美術館界の災害対策の地均しを不断に続けている。そうしたものの一つが、上記の「資機材リスト」だった。今回取り上げる連絡網も、地均しの一環である。この連絡網は、全国を10ブロックに分け（本誌の「ブロック報告」と同じ）、それぞれに本部館と副本部館を設定し、災害発生時に被害の有無や被害の程度

に関する情報を集約して、事務局に伝える役目をお願いするものである。2年間の議論の末、1998年6月2日、全国美術館会議は総会で「大災害時における対策等に関する要綱」及び「大災害時における連絡網実施要領」「大災害時における援助活動実施要領」を採択した。これらの成文化されたルールは、ウェブサイトの「全国美術館会議と災害対策」ページから、だれでもいつでもダウンロードできるようにになっている。連絡網は、実際には2011年から具体的に機能し始めて、今日に至っている。

日本という国は狭いようで広い。気候や地勢には様々な違いがあり、それらに根ざした風土や危機意識も多様だ。東海ブロック（静岡、岐阜、愛知、三重）は、本部館を中心に毎年3月11日、架空の災害発生を想定したファクスによる連絡訓練を行い、訓練結果を事後にまとめてブロック内で共有している。恒例の訓練だから参加率は極めて高い。東京ブロック（東京）はこれに倣って2020年と22年、やはり3月11日に同様の方法で連絡訓練を試みた。参加率はそれぞれ77%と61%。東日本の太平洋側に比べると大規模地震が少ない北信越ブロック（新潟、富山、石川、長野）は、それでも中規模程度の地震はときおり発生し、その度ごとに本部館が迅速な情報収集に動いている。こうした本部館と副本部館の引き継ぎは、これもブロックごとに異なる。持ち回りローテーションが確立しているブロックもあれば、致し方ないことも知れないが、そもそも自館が本部館であることを忘れていたところもある。2022年のバトンタッチも円滑に済ませたブロックと難航したところがあった。

美術館の災害対策が横断的に、継続して取り組まれていることが、各館のあらゆる活動を支えている。作品収集や展覧会、教育普及活動は、直接に災害対策の恩恵を受けないだろう。だが、その存在が周囲から美術館への信頼を生んでいることを、脳裏の隅に留めてほしい。どんな美術館であっても、いったん被災すれば、自分たちの力

だけで問題解決はできない。また全国美術館会議の活動は、だれかがそっくりやってくれることなく、一人ひとりが少しずつ役割を受け持つことで成り立っていることを、あらためて強調しておく。一見重荷に思えるかも知れないが、多くの関係者が作業を分担していけば、あるいは分担する関係者の数が多くなればなるほど、各人の負担は軽くなり、そして活動全体の内幕が膨らんでいくのである。

個人的な思い出を書き残したい。1995年1月17日に阪神淡路大震災が発生し、その3週間後、全国美術館会議は文化庁文化部に組んで、被災美術館のレスキュー活動を行った。作業を終えた午後、アメリカから応援に来てくれた2人のコンサバターと、小さな喫茶店に入ったことがある。その頃の神戸は壊れた建物はそのまま、各所で道路と鉄道が寸断されていたが、垂れ下がる電線をくぐってタクシーは走っていたし、水道と電気、ガスがある程度復旧していて、営業を再開している喫茶店も眼についた。3人で温かいコーヒーを啜っていると、震災後初めてらしい常連客が一人、入ってきた。すわる前の店主との会話。「生きとったん?」「生きとったわ。生きとったん?」「生きとったわ。日本語が分からないアメリカ人でもおよその見当はついたらしい。でもつつい、そのやりとりを訳して伝えなくなった。“Are you alive?” “Yes, I am still alive. And you?” “Me too.”

東京から被災地に向かうとき、人命や、人間のもっとも基本的な生活が脅かされているのに、美術館や博物館のレスキューに行くのか、という反対が根強くあった。神戸に行ってみるといたるところで、「生きとったん / 生きとったわ」が挨拶代わりにになっている。そのとき、「人間が生きていくには、美術館や博物館が絶対に必要だ」と考えた。“Me too”と言い合える世の中を支えるためだ。だが、それは美術館人の驕りではなかったかという疑念が、今も消えない。28年経っても気持ちの整理がつかないままなのに、もうキャリアの終幕を迎えようとしている。

賛助会員、個人会員の皆さまへ

昨年、ZENBI 全国美術館会議機関誌の投稿規定を改定しました。新しい投稿規定は右記のとおりです。

vol.23 より、「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募ることといたします。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。

同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホームページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。まずは機関誌で vol.22 より業種の掲載を開始しました。

また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会準備を進めているところです。

今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

広報委員会

『ZENBI』では、次の要領で広く 皆さんからの原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・ 展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・ 原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・ 原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・ 全国美術館会議正会員の職員、個人会員、賛助会員の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・ 匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・ 原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・ 第24号(2023年7月発行予定)については4月30日、第25号(2024年1月発行予定)に関しては10月31日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)
ikedai@kanazawa21.jp (池田)
aoyama_k@nmao.go.jp (青山)

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒682-0816 鳥取県倉吉市駄経寺町 212-5
倉吉未来中心 2階 鳥取県立美術館(美術館整備局)
(一社)全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0858-47-3011

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

制定：平成23年7月24日
改正：令和4年1月31日
全国美術館会議広報委員会

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として下記に限る。
 - ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
 - イ 全国美術館会議個人会員
 - ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
- (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは(一社)全国美術館会議広報委員会(以下「広報委員会」という。)に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右

肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。

- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は(一社)全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

編集後記

『ZENBI』の23号をお届けする。3年に及ぶ新型コロナウイルス感染症は拡大と収束を繰り返しながら新しいリスクとしてもはや私たちの生活の一部となりつつある。行動制限や移動の自粛は緩和され、私たちにとって新しい日常が始まった。展覧会の事前予約や各種事業のオンラインでの開催、美術館としても試行錯誤を繰り返しながら、状況への対応を迫られている。厳しい道のりとなるであろうが、私たちはこの困難を乗り越えていかなければならない。

昨年、ヨーロッパでは戦争が始まり、保険料の値上がりに加えて輸送費、人件費や工作費の高騰と美術館と展覧会をめぐる状況は別の意味でも厳しくなっている。展示や調査研

究、教育普及といった美術館の基本的活動においても単館での実施が次第に困難になり、美術館相互の新たな協力が模索される状況の中で、今後、全国美術館会議は連帯の新たなプラットフォームとしての役割を求められることとなるのではないだろうか。

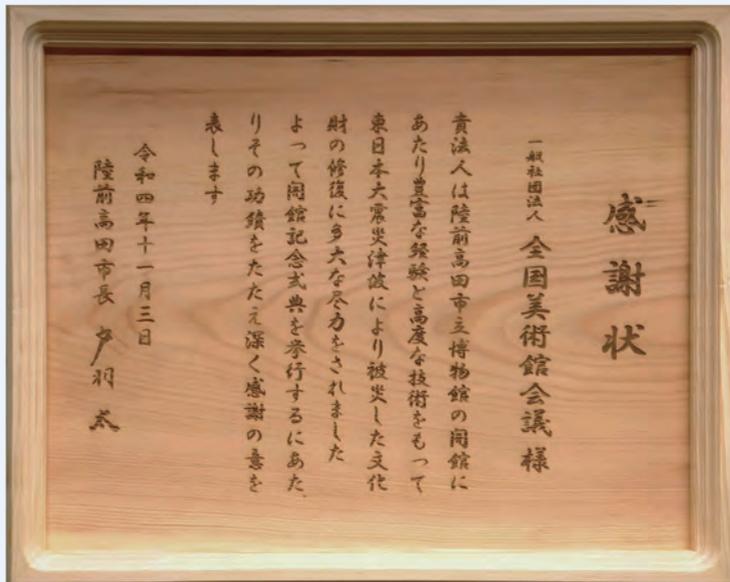
公益財団法人西宮市大谷記念美術館の館長であり、全国美術館会議の監事を務めていただいた越智裕二郎さんが先日急逝された。私事となるが、神戸で初めて学芸員の仕事に就き、右も左もわからなかった私を神戸の作家たちに連れ回していただいたのが当時は神戸市立博物館に勤務されていた越智さんであった。人懐こい越智さんの笑顔が今も目に浮かぶ。心より御冥福をお祈りする。(O)



デジタルアーカイブジャパン・アワード (DAJアワード) 受賞の表彰状とトロフィー

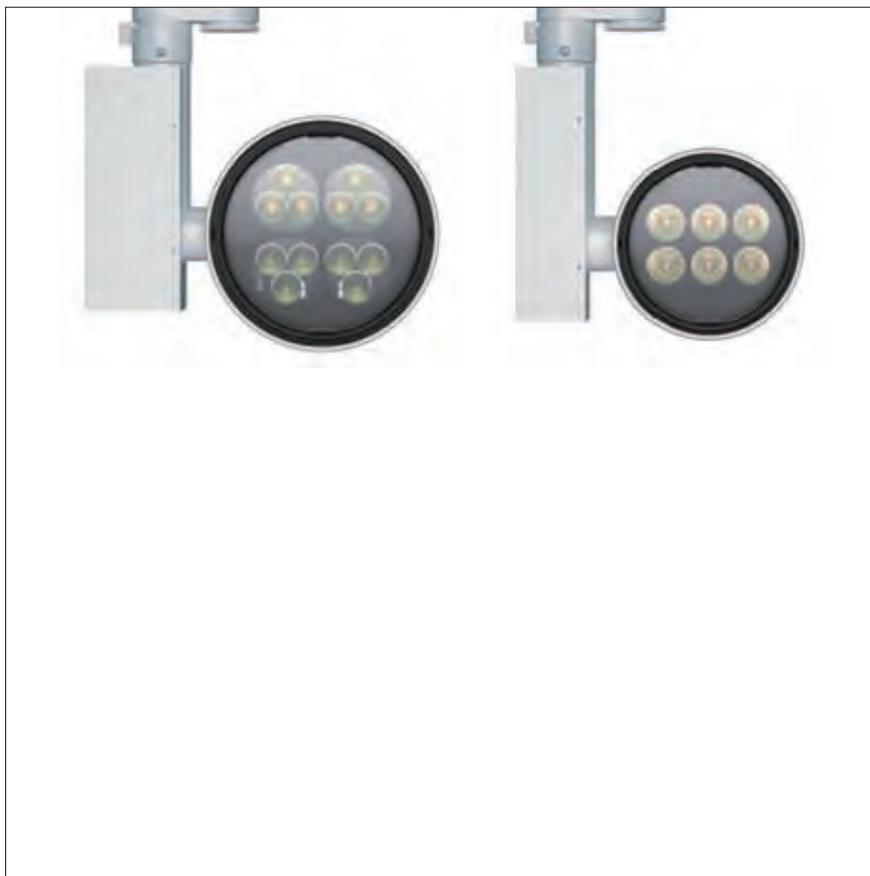


思い出の一枚
第14回総会集合写真(昭和40年・五島美術館)



陸前高田市長からの感謝状

Optec Spotlight



ERCO Optecは、美術館・博物館の照明に必要な機能と品質を全て持ち、さまざまな展示様式にも柔軟に対応することができるLEDを光源としたスポットライトです。

ERCO 独自開発・製造の最新型光学レンズシステムにより、作品のみをアクセント照明するスポット配光から、壁面を均一に照射するウォールウォッシュ配光、**8m**超の高天井の空間にも対応する高出力タイプまで幅広く品揃えされており、鑑賞者だけでなく運営者もストレスなく最高の光環境を構築できます。

ERCOでは長年にわたり培ってきた世界中の展示空間における経験をいかして、製品だけではなく、最適な照明ソリューションの提案をいたします。

ERCO

ライトアンドリヒト株式会社 〒105-0014 東京都港区芝2-5-10 TEL:03-5418-8230 / FAX: 03-5418-8238
※平成27年1月より社名変更いたしております(旧社名:エルコライティング株式会社)。